私のなかの歴史

愛は血よりも濃し――⑦

黒松内つくし園理事長 広瀬（ひろせ） 清蔵（せいぞう） さん

施設病対策　スキンシップで愛情注ぐ

後志管内三和村（現黒松内町）に児童養護施設「つくし園」を開設した1956年、すぐに定員50人が埋まりました。このうち40人が幼児でした。

入所した児童のほとんどは貧困家庭出身で、みな栄養失調でした。ごはんのおかわりは3杯も4杯もしました。今の子どもの3倍は食べましたね。毎日欠かさずに酪農家のもとへ生乳9リットルを買いに行っては、煮沸して飲ませました。生乳の入った一斗缶は本当に重かったなぁ。卵も栄養価が高くてかつ安いので、よく食べさせました。子どもたちから「卵ばっかり」と言われたこともありました。

困ったのは最初の年の12月、職員のボーナスを払おうと道に相談すると「措置費の中に含まれている、職員1人当たり2千円の超勤手当から出すように」と言われたのです。役場職員でも7千～1万円もらっていた時代に、2千円では恥ずかしい。当時の一宮康祐村長にお願いし、ポケットマネーから3万円を出していただいた。それを加えて、職員10人全員に5千円を出すことができました。

また当時、園の子どもたちは夜尿が多かった。保母たちは童話を読んで子どもたちを寝かしつけてから、夜なべでパンツを作り、心理学の勉強に励んだ。

子どもをだっこするぼく（中央）と保母職員ら＝1960年ごろ

国鉄で働いていた村内の逢見留五郎さんは、そんな姿を見て、当時は貴重だった電気洗濯機を寄付してくれました。

それでも57年2月、つくし園は窮地に陥りました。当時、国から子ども1人当たり月240円の暖房費をもらっていたのですが、幼児が凍えるといけないとマキをくべていくうちに、その年の分を使い切ってしまった。すると、共同募金から7万円が寄付されたのです。半分をマキ代に、残りでおもちゃを買いました。その年の暮れには、共同募金でテレビもいただいた。本当にありがたかったなぁ。

しかし、地元の共産党員がぼくに「共同募金への反対声明を出せ」と言ってきました。その人は「共同募金があると、国が本来は福祉のために使う金を軍事費に回す」と言うのです。ぼくは拒否しました。そんなこともあって、次第に党からは離れていきました。

当時、ぼくが取り組んだのは、施設育ちの乳幼児に多かった情緒的な障害「ホスピタリズム」（施設病とも言う）の克服です。というのは、乳児園から受け入れた子どもが16人いたのですが、この子たちは本当にかわいそうだった。表情がない。一言もしゃべらない。フラストレーションがたまると壁や床に頭をぶつける。どうしてこういうことになるのか、札幌の道立乳児施設に見学に行きました。

そこでは、大きな部屋に15、16人が寝かされ、二つ折りにした座布団を使って、哺乳瓶があてがわれていた。部屋に職員は1人。全くスキンシップがなかったのです。これでは子どもたちは愛情を受け取れません。当時は職員も少なく、命をつなぐのが精いっぱいだったのです。

ぼくはつくし園に戻って、保母職員一人一人に子どもたちをおんぶしてもらったり、両手に一人ずつ手をつないだりしてもらいましたが、保母職員5人では到底、人手が足りません。職員と話し合った結果、ぼくは、地域の母親たちの協力をお願いするしかない、という結論に達しました。

（聞き手・長谷川善威）

私のなかの歴史

愛は血よりも濃し ―⑧

黒松内つくし園理事長 広瀬（ひろせ） 清蔵（せいぞう） さん

1957年ごろから、つくし園の中で季節保育所を始め、地域の母親と幼児に来ていただきました。お母さん方にも入園児をだっこしてもらい、地元の子どもたちには入園児と一緒に歌やお絵描きをしてもらいました。

効果はてきめんでした。当時、一番困ったのは入園児たちが部屋の中でうんちをしてしまうことでした。施設のトイレは暗くて底が深いたこつぼ便所でしたから、行くのが怖かったんですね。保母職員が連れていって、便器にまたがらせてもうんちをしてくれませんでした。でも、地元の子どもたちは平気で便所に行った。当時は、どの家庭もたこつぼ便所でしたから。

子どもって、そういうのを見てまねるんですね。入園児も自然と便所に行けるようになりました。でも、道の監査で「施設の基準外なので、季節保育所は他に移すように」と待ったをかけられました。当時はそういう考えが一般的でした。

そこで、近くの寺にお願いし、保育所は続けました。63年、ぼくは保育所の開設を公約にして黒松内町議に当選。国の出先機関だった建物を町が改修し、つくし園が運営委託を受け、67年に開園しました。町内やつくし園の一部からも「保育所は公立にすべし」という声はあったけれど、今でも民間でよかったと思う。公立だと金がかかる上に、お役所というのは公平性を重視するあまり、動きだすのが遅くなる傾向があります。「公から民へ」というのは、ぼくの一貫した主張です。

炊き出しに来てくれた地域の母親たち。中央奥にいるのがぼく。子どもたちはよく食べたなあ＝1958年ごろ

そうした思いから、町内に福祉関連施設を次々と手がけました。61年には、老人ホームを開設しました。これは、北見の老人ホームを訪れた時、黒松内出身の元開拓農家の人たちが7人もいることを知ったからです。彼らに「もし老人ホームがあったら黒松内に戻りたいですか」と聞いたら、「帰りたい」と切々と訴えました。

福祉施設 地域の声に応え次々開設

そして、老人ホームの入居希望者を募るため、町内の家々を回っていた時、ある少年に出会いました。少年はぼくに話しかけてきたのだけれど、何を言っているのか理解できない。知的障害児と分かりました。

「恥ずかしくて外に出せない」という父親に、ぼくは「憲法では、どんな子も教育を受ける権利があるのですよ」と諭したのですが、今度は父親が「この子を受け入れてくれる施設なんてない」と言います。ぼくは障害児を受け入れる施設の建設を決意しました。66年、知的障害児施設「しりべし学園」を開設しました。

しりべし学園も当初、なかなか地域に受け入れてもらえませんでした。親たちは「言うことを聞かないと、しりべし学園に入れるぞ」と言って子どもをしかり、町内を歩く学園のダウン症の子どもが、からかわれたこともありました。

それでも、子どもたちは花壇整備や新聞配達を一生懸命やり、町にとけ込んでいきました。75年には、子どもたちの成長の記録をまとめた「いっしょけんめいやってるんだ―ちえ遅れの子らの記録」を出版し、日本図書館協会の選定図書にも選ばれました。

77年、成人の知的障害者のための「しりべし学園成人寮」を併設し、79年には念願の道立養護学校の分校が町内に開校しました。（聞き手・長谷川善威）

私のなかの歴史

愛は血よりも濃し ―⑨

黒松内つくし園理事長

広瀬 清蔵（ひろせ せいぞう）さん

坂本九ちゃん 感謝のジャガイモ 今も送る

ぼくが歌手の坂本九ちゃんと出会ったのは1976年、九ちゃんが司会を務めるSTV（札幌テレビ放送）の福祉テレビ番組「ふれあい広場サンデー九」の第2回に、里親の代表として出演した時でした。終了後、ぼくが九ちゃんに「児童養護施設や障害児施設を運営しているので、ぜひ来てほしい」とお願いしたところ、約束を守って、79年にサンデー九の収録のために訪ねてくれたのです。

ロケ隊は、つくし園と保育園の子どもたちの合同遊戯や、老人ホームが行っていた地域の寝たきり高齢者の入浴サービスを撮影。九ちゃんは、小さな町内に多くの福祉施設があり、地域にとけ込んでいることに驚き、「この町には福祉の春の風が吹いている」と表現してくれました。大スターなのに気取らない人柄で、昼食の時は「ごちそうさま。あっ、間違えた。いただきます」と周囲を笑わせてくれました。

82年7月のつくし園開園25周年の記念式典には、講演者として駆けつけてくれました。九ちゃんは「ジャガイモは大好き。感謝状にイモ1袋とあったが、1袋とはどれだけの量か何度も考えていました」と会場を笑いに誘いました。手渡した感謝状に「つくし園のある限り、ジャガイモ1袋を毎年贈り、謝意を表します」と書いていたのです。本当は20キロだけれど、豊作の時はもっと多く送ろうと、あえて1袋と書いたのです。

黒松内つくし園を訪れ、子どもたちをだっこする坂本九ちゃん（中央）＝1982年

九ちゃんは「ぼくはジャガイモのように生きたい。みんなもイモのようにたくましく強く生きていってほしい」と子どもたちに語りかけました。そして、「生きていてよかった」を披露してくれたのです。圧倒的な歌唱力に、みんな感動しました。

それにしても、子どもたちの喜びようといったら。首にぶら下がる子、背中におぶさる子、腕にすがりつく子。いつまでも離そうとしません。九ちゃんは両足を開き、両腕に力こぶを盛り上がらせて踏ん張っていた。首筋もぴんと張って、真剣そのものでした。

子どもたちは「九ちゃんの手、あったかかったよ」「九ちゃんが『がんばれよ』って。ぼく、がんばるんだ」と次々と報告に来ました。かけがえのない時間でした。

85年7月30日、後志管内蘭越町に子どもたちのレクリエーション基地を作った時も、九ちゃんは収録に来てくれました。ぼくに「この番組をきっかけに、全国に波及してほしい」と語っていたのを覚えています。

しかし、半月後の8月12日深夜、北海道新聞の記者から「群馬県御巣鷹山に日航機が墜落し、坂本九さんが乗っていたらしい」と電話があり、コメントを求めてきました。ぼくと九ちゃんは「サービスは民間に限る。飛行機は全日空しか乗らない」と互いに言っていました。だから「九ちゃんは日航機には乗らない。おそらく乗っていない」と言いました。

翌朝、ぼくはテレビ画面に「大島九（ひさし）」（坂本九さんの本名）の名前が流れるのを、ぼうぜんと見つめていました。後に、その日に限って全日空が満席で、手配できなかったことを知りました。

ぼくは今も毎年、約束通り、九ちゃんの妻の柏木由紀子さんに、ジャガイモを送り続けています。

（聞き手・長谷川善威）

私のなかの歴史

愛は血よりも濃し ―⑩

黒松内つくし園理事長
広瀬（ひろせ） 清蔵（せいぞう） さん

ぼくは1956年の児童養護施設「黒松内つくし園」開設当初から、「親の言い分、子の言い分」と題した対話集会に取り組んでいます。親というのは職員のことです。2000年に法制化され、どの施設も苦情相談窓口を設けるようになりましたが、つくし園ではずっと以前から取り組んでいました。

園児たちは自由に意見を書いて目安箱に入れます。集まった意見を基に、毎週日曜に対話集会を行うのです。昔は「カレーライスの日をもっと増やしてほしい」など食べ物に関することが大半だったけれど、今は子ども同士や職員との人間関係についての意見が増えました。「片付けようと思っていたのに、（職員に）先に注意される」というのもありました。子どもたちに言わせると、怒るにも怒り方があるというんですね。

ぼくの信条はたたかないことです。でも、甘やかしもしません。「ご飯なんかいらない」と反抗する子がいたら、「じゃあ、食べなくていいよ」と言います。甘やかすと、癖になりますから。でも、「朝食だけはしっかり食べてくれよ」と付け加えています。

今の子に生きる力を教えるのは大変なことです。昔は風呂に入るのにもまきを割らなくてはいけなかったけれど、今は蛇口をひねれば湯が出ます。つくし園では子どもたちが畑でジャガイモを栽培し、自分たちでカレーを調理しています。そうすることで、足りない体験を補うのです。

盛況のふれあいまつりで、子どもたちとステージを見るぼく（中央）＝1998年

寄せられる意見はつくし園だけで年400件に上ります。こんなに意見の多い施設もないですよ。半数以上は職員や日々の食事への感謝の言葉です。今の子は、きちんと感謝できる素直な子が多いですよ。現在はほかに、法人が運営する10施設の苦情を2カ月に1度、三坂司黒松内郵便局長をはじめ外部委員らで構成する「苦情解決委員会」で検討しています。

開かれた施設 イベント、奉仕で地域と絆

地域に開かれた施設運営にも取り組んできました。93年、後志管内黒松内町内のクリーニング店が廃業すると聞いて、ご主人に「知的障害者施設で引き受けさせてください」とお願いしました。障害者の新たな雇用の場になると考えたのです。結果的には、町内唯一のクリーニング店を維持することにつながりました。

05年からは、知的障害者が地域で自立して生活するグループホームを始め、現在は5カ所で計25人が共同生活しています。入居者たちは、商店や飲料水工場で働きながら、町内会の新年会や花見にも参加しています。冬は高齢者世帯の除雪ボランティアを行い、毎年町内の一人暮らしの高齢者を招いた昼食会も開いています。今では町にとって欠かせない戦力になっていますよ。

そんな中、知的障害児施設の園長として、先頭に立って地域との絆づくりに取り組んだ妻博子は、88年に他界しました。67年に博子が発案した、障害者が野菜を販売し、ステージを披露する「ふれあいまつり」は、毎年3千人が訪れる一大イベントに成長しました。

今年は6月26日に開催し、坂本九ちゃん（故人）の長女で歌手の大島花子さんがコンサートをしてくれます。成長した姿を見るのが、今から待ち遠しいです。

（聞き手・長谷川善威）

私のなかの歴史

愛は血よりも濃し ―⑪

黒松内つくし園理事長
広瀬（ひろせ）　清蔵（せいぞう）さん

ぼくは福祉施設を運営し、里親でもあったから、さまざまな団体の役を引き受けてきました。中でも、1973年、オイルショックに端を発した燃料高騰が続く中、北海道社会福祉協議会の理事として、国に燃料予算の増額を求めたことは思い出深いです。

何しろ、燃料代が1、2年前の3倍になりましたから。道内の福祉施設にとって危機的な状況でした。そんな時、NHKのテレビ番組で、当時の厚生省の戸沢政方事務次官と対談する機会がありました。出演前のぼくのところに厚生省の職員が来て、「燃料予算を3倍にするから、あまり厳しく責めないでくれ」と言ってきたのです。そんなことができるのかと問いただすと、特に寒さの厳しい北海道に、定員割れで予算の余った施設から集めて調整するというのです。戸沢事務次官も約束してくれました。北海道に帰ったら、道職員たちが喜んでくれましたね。

84年、ぼくは資生堂の児童福祉海外研修団の団長となり、オーストラリアの児童福祉施設を訪ねました。子どもたちを少人数のグループに分けて、きめ細かな指導を行うユニットケアの運営方法を学ぶためです。

児童養護施設「黒松内つくし園」では、開設から間もない58年から、ユニットケアの原型を取り入れてきました。昔は単独責任制と呼んでいました。子どもたちを10人程度の7グループに分けて、部屋ごとに受け持ちの保母職員を決めるのです。保母は担当する子どもの育成記録を一人一人つけて、記録を基に園の全体会議で自立に向けた計画を練るのです。保母の負担は重くなりますが、決まった保母が見守ることで、子どもたちの変化がきめ細かく分かるのです。

児童福祉海外研修団の団長としてオーストラリアを訪れたぼく（前列右から2人目）＝1984年

専門性の追求

施設長の資格 導入できず

オーストラリアにはその後、私費でも行きました。つくし園では現在、子どもたちを6、7人に分けて居室を決め、洗濯機やトイレも設けて、基本的に居室を中心に生活するようにしています。

もう一つ、取り組んできたのは施設長の専門性を高めることです。というのは、福祉施設というのは施設ごとにレベルがずいぶん違うんです。これは、施設長の質によります。優秀な施設長というのは、よく施設内を見回ります。だから、例えば、優秀な施設長のいる老人ホームは、利用者から「おしっこが漏れた」などの呼び出しのベルが鳴ることが少ないんです。先に見回って、利用者の異変に気付きますから。

社会福祉法人の成り立ちにも原因があります。初代は苦労の末に開設し、信念を持って運営するのですが、2代目、3代目と継承していくと、どうしても当初の理想が薄れていってしまうものです。

ぼくは94年、全国の施設長でつくる日本福祉施設士会の会長に就任しました。真っ先に取り組んだのは、以前からあった施設長の民間資格を、公的なものに昇格させることです。職員は保母や介護士の資格がないと就職できないのに、施設長がなれるのはおかしい。

しかし、これは頓挫しました。座学や実習など厳しい勉強が必要で、施設長の中からも敬遠する声が上がりました。振り返って、ぼくの人生の中でも大きく悔いが残る分野です。

（聞き手・長谷川善威）

私のなかの歴史

愛は血よりも濃し ―⑫

黒松内つくし園理事長
広瀬（ひろせ）　清蔵（せいぞう）さん

今年5月下旬、児童養護施設「黒松内つくし園」の卒園生や職員たちが、ぼくの卒寿（数え年90歳）のお祝い会をしてくれました。50人は集まったかな。配偶者や子どもを連れてきた卒園生もいました。ぼくにとっては「孫」ですよ。うれしかったなあ。

ぼくは、多くの「子」や「孫」に支えられています。札幌で居酒屋を営んでいた石田政雄君は、店内に「ぼくはつくし園の卒園生です」と書いた張り紙を張って、つくし園への募金を呼びかけ、これまでに640万円を寄付してくれました。社会に出て、児童養護施設の出身と公言するのは難しいことです。偏見もあり、多くの卒園生が苦労しています。だからこそ、堂々と名乗る石田君の気持ちがうれしかった。

胆振管内洞爺湖町の菓子職人で、卒園生の館洞勝雄君は40年以上にわたって毎年、園のクリスマス会に約80人全員分のケーキを持ってきてくれます。彼は、ぼくが里子として育てた美代子と結婚した。いつか嫁にやれるように、美代子には家事だけは一生懸命教えたものです。だから、結婚した時はホッとしました。でも、その美代子も4年前に亡くなりました。ほかにも、事故や病気で亡くなった卒園生もいます。ぼくにとっては子どもを失うつらさです。

卒園生や職員に卒寿を祝ってもらい、ちゃんちゃんこを着たぼくと妻悦子（右隣）＝今年5月

OBだけではなく、多くの人から善意をいただいてきました。つくし園開園以来、100万円以上の寄付をしてくれた人は108人に上ります。その一人一人の名前を覚えています。

昨年暮れから、匿名の寄付者から全国の児童養護施設にランドセルなどのプレゼントが相次ぐ「タイガーマスク現象」が起きました。東日本大震災では、短期間に多くの人から義援金が集まりましたね。かねてから、日本に「寄付文化」を根付かせたいと考えていたので、大変うれしく思います。

子どもと孫　弱者の目線で運営 今後も

オーストラリアでは、死後に遺産を福祉施設に寄付するのが自然なことでした。この習慣を、何とか日本でも広めたい。日本は主に税金で福祉施設が成り立っていますが、納税者からみれば、どうしても「とられる」という感覚になります。世間が社会的弱者に厳しい視線を注ぐことにつながりかねません。その点、寄付は意志を持ってするのですから。最近のように、社会が弱い立場の人に目を向けてくれることは、本当にありがたいです。

1990年に再婚した妻悦子は、毎日30品目のおかずを用意し、ぼくの体調管理を気づかってくれています。結婚前は登記事務所に勤めていましたが、今では立派に介護老人保健施設の管理者を務め、利用者本位の運営に努めてくれています。そのかたわら、札幌などに出張するぼくの送り迎えをしているのです。いつも感謝しています。

ぼくは、今も毎朝6時に起床し、子どもたちに「おはよう」を言いに自宅そばのつくし園に行きます。社会の中で、最も弱い立場の子どもたちです。その目線に立った運営を、これからも貫こうと思います。ぼくにとって、子どもたちの笑顔を見るのが、何よりの喜びなのです。

（聞き手・長谷川善威）

＝おわり＝

◇

次回は帯広市在住の翻訳家、中山善之さんです。